



Title	ハイデガーの学問批判について
Author(s)	中橋, 誠
Citation	メタフュシカ. 1999, 30, p. 113-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66622
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ハイデガーの学問批判について

中 橋 誠

未知のものに対するあこがれや不安に駆られて、それが何であるかを見極めたいという欲求は誰しも、多かれ少なかれ持っているものである。アリストテレスも『形而上学』の冒頭で「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する」(Metaph.

Α1, 980a)¹と述べている。ここでアリストテレスは、感覚を通じて得られた知は普遍性からほど遠いものであるがゆえに、普遍性を目指すには学問的認識、しかも理論的な学問的認識を目指す必要があると主張する。この主張は、現在のわれわれの常識とも合致する。われわれはなにかについて知を得ようとするとき、その対象を所与の状態に放置することなく、先人に教えを請うたり、また自らあれこれの検討を加えることで、その知を理論的に限定・確定していく。このとき、われわれはすでに無反省な立場を脱しはじめていると言えよう。この延長線上に厳密な思惟たる学問的思惟が存すると通常考えられている。この学問

的思惟の不可欠性については言及するまでもあるまい。われわれは日常生活においてすでに、学問的思惟を通じて得られたさまざまな成果を享受し、それなしにはもはや生きていけないほどである。

しかし、以上のような常識的な見解に対して挑発するかのように、「学問 (Wissenschaft)² は思惟しない」(WD, 4.57, 154, 155, VA.133)と主張する思索者がいる。ハイデガーである。これは何を意味しているのか。思惟しない学問は何を遂行しているのか。思惟こそが学問の本分ではないのか。しかも、ハイデガーが「学問」で考えているのは、古代ギリシアの *epistēmē* や中世の *doctrina, scientia* とは区別された、近代そして現代の学問である (Vgl. HW, 74, VA.46f.)。近現代の学問の、それ以前の学問に対する成果の著しさを考えると、近現代の学問の思惟こそがもっとも深いものではないか。ことごとく常識に反する発言をあえてなすハイデガーは、「学問は思惟しない」という命題

で何をわれわれに訴えようとしていたのか。

ハイデガーによる学問批判は、言及されることが少ないものの、その生涯にわたるものである。またそもそも、現在われわれが全集版に目にすることができるハイデガーの最初の講義自体が学問批判で始まっている（一九一九年）。しかし、批判といってもそれは、ハイデガーがおのれの「哲学の規定（Bestimmung）のために」（GA56/57）必要としたものであり、学問の拒絶・廃絶を目的としたものではない。『存在と時間』（一九二七年）においても事態は変わらない。『存在と時間』でハイデガーの思惟以外のあり方をする思惟として「実証的」という形容のもとに一括される学問は、存在論的な基礎を前提していながらそれを見逃しているという点に関しては批判の組上にのせられているものの、それによって拒否されたり否定的な判断が下されているわけでは決してなく（SZ50）、³ここで実証的学問が引き合いに出されるのは、その言及がなされる節（第十節）の名称から明らかなように、「〔実証的学問である〕人間学・心理学・生物学に対する（ハイデガーの思惟である）現存在分析の限定」（SZ51）を目的とするものである。事態がこのようなのであれば、ハイデガーによる学問把握を明瞭にし、その学問批判を検討することは、ハイデガーがおのれの思惟をどのように捉えていたかを探索するための恰好の機会となるのではないか。そしてそれは同時に、普段われわれがそれに携わ

っていないが、それほど関心を向けず自明視している「学問」を再検討のための機会をも与えてくれるであろう。⁴

一

ハイデガーによる学問批判を、まずはその初期の思惟において確認したい。一九一九年の講義においてハイデガーは学問をすでに、それ以降と同様、「個別的なもの」として捉えている。⁵それは、学問が学問一般としてではなく、おのおの固有の探求領域を有するような個別の学問——たとえば法学や地学など——としてのみ成立していることを指している。学問が個別的なものとして多様なあり方をしている理由は、各学問を支える理論の多様性に求められる。理論は事象への接近通路を確保する視点、それゆえ学問にその探求領域を与え、そのうちで対象・客観とされるはずのものを決定し、概念把握を可能にする学問の基盤である。この理論が一つのものには限定されずさまざまなに考えられるがゆえに、学問も多様なあり方をせざるを得ないのである。各学問はそれぞれ固有の理論を通じてのみ、それぞれの真理を獲得している。それゆえ、学問を支える理論的態度は、いかなるものであれ理論に先立つ真理、理論に先立つ対象を許容せず、理論に先立つ第一義的な所与を、いまだなんらの秩序を持たない感覚データ（Empfindungsdaten）としての

み受けとっている。この理論的態度における対象認識、つまり感覚データ（感覚の多様）と理論（概念）との総合により成立する対象認識という考えは、カントの思惟にその源泉が求められるような、現在のわれわれにとつても違和感のないものである。しかしこれに対してハイデガーはある疑念を表明する。それは、わざわざ理論的態度をとらずともそれに先立ちすでにたとえば机を机として、鉛筆を鉛筆として、つまりなにかを一定の意義において受け取っている、つまり、意義として与えられる一定の秩序のうちに生きているわれわれは、「どのようなものであれ事象把握という知的迂路を経ずともわたしに直接与えられている」「意義的なもの (das Bedeutsame)」をこそ「第一義的なもの」(GA56/57,73) として堅持するべきではないかというものである。ここからハイデガーは、意義的なものの体験を理論的態度に先立つものと考え、意義的なものの体験の破壊・歪曲としてのみ理論的態度を解するようになる (Vgl. GA56/57,85,89, GA61,86,90)。こうしてハイデガーは、理論的態度から、その歪曲・制限を逃れた根本的態度、意義的なものの体験に立ち返ることをおのれの課題とし、この還帰を「現象学的な生」(GA56/57,110) と名づけている。ハイデガーのこの主張に対しては、しかしながら、もし意義が与えられ、それが言葉で表現されるのであれば、そのときにはすでに一定の理論に基づく客観化が働いているのではないかという反論が理論的

立場から予想される。これに対してハイデガーは、「言葉がすべてそれだけですでに客観化しているという考え。人が意義のうちで生きているなら、当然、意義されたものを理論的に考えられたものとして把握しなければならないという考え。意義の充実は即座に対象を付与するものでしかないという考え」は偏見だと断じ、これは、「意義機能の一般化・普遍性性格が、類概念の理論的・概念的普遍性と同一であるという思いこみ」と結合したものだと論じる (GA56/57,111)。この記述では説明が不十分な上、一九一九年の講義ではこれ以外に、この点に関する記述は見あたらないが、一九六四年にはほぼ同一の問題が再び取り上げられ具体的な説明がなされている。そこでは、「あらゆる思惟が表象として、あらゆる発話も口外としてすでに『客観化している』」(GA9,71) という通常の信念に対して、薔薇の観賞 (GA9,73, Vgl. SG,71ff)、病人にかける慰め・励ましの言葉 (GA9,74) の例が挙げられ、発話によりなんらかの意義が与えられていても、それは必ずしも客観化・理論化を伴う必要のないことが指摘されている⁽⁶⁾。

こうしてハイデガーは、理論的態度に先立ち、しかしそれによって一定の秩序が与えられている、意義的なものの体験への還帰をおのれの課題とするのである。しかしわれわれはなにかについて考察をしようとしたときには、さしあたってすでに理論的態度に陥ってしまったている。それゆえ意義的なものへの還帰

は必然的に、理論的態度の「解体」(Destruction)として遂行されることになる (Vgl. GA59,185)。この解体を通じてわれわれは、「先立っての把握 (Vorgriff)」に導かれて、理論的態度に先立つ「哲学的な根本経験」(GA59,35)へもたらされると考えられている。それが可能な理由は、解体が、われわれが理論的態度に先立ってそのうちにいたはずの「歴史的な具体態にある事実的な生活経験・生活世界に関わっている」(GA59,181) (強調は引用者) ことに求められる。そうすると、この解体により目指される意義的なものの体験とは、後にやはり同じく「もつとも身近な具体態」(SZ,252)と表現される「日常性」(Alltägigkeit)に等しいものだと考えられる。この推測は唐突に感じられるかもしれないが、ハイデガー自身、一九二九／三〇年冬学期の講義で次のように述べている。

「重要なのは特殊な態度をとることではなく、逆に、意識や体験などの心理学的またはその他の理論から逃れ、日常的で自由なままなしにおのれを委ねること (Gelassenheit) である。」 (GA29/30,137)

ここから、『存在と時間』(一九二七年)において日常性が探求の着手点とされた理由も明瞭となろう。そこで日常性は、「さしあたってそして大抵 (zumeist und zumeist) のあり方」と

されているが、それは、理論的態度に先立ちその制約を逃れた根本的態度という意味においてなのである。それゆえ、日常性においてこそ「任意で偶然的構造ではなく、…一貫して保持されている本質的な構造」(SZ,166) (強調は引用者) が解明可能とされねばならないとハイデガーは考えたのである。

二

以上のような過程を経て、ハイデガーはその思惟の前期において日常性を探求の着手点とし、理論的態度の成立由来をこれに求めるようになる (Vgl. SZ,351,356)。日常性から理論的態度への移行は、あれこれのものに関わる実践的態度から、それを逃れた、客観的諸事実の観察への移行であると通常考えられている。しかし、理論的態度をも、その関わるべき対象が必要とされるという意味で、実践的態度の一つとして捉え、そして、先で触れたように、客観に対する理論的態度の先行性を認めるハイデガーは、このような通常の見解には与しない。日常性から理論的態度への移行としてハイデガーが唱えるのは「決意性」(Entschlossenheit)のみである (SZ,363)⁽⁷⁾。決意性においては、ハイデガーが「投企 (構想)」(Entwurf)と術語化する、一定の理論の選択がなされる。投企は、事象がどのようなあり方をしているか——たとえば経済学的なあり方、歴史学的なあり方

など——をあらかじめ定め、それを通じて、それに適した概念性、対象となるべきものの、探求領域を画定する (Vgl. GA25,32)。この過程を経て、対象は「純粋な発見」に対して投企『され、すなわち、客観となる』(SZ,363) ことが期待される。こうして学問は、もともと真理を追究しておのれの対象の発見につとめる性質を有しているがゆえに、ひたすら対象の「被発見性のみを予期する」(SZ,363) ようになり、日常性で妥当していたような実践的態度は身を潜める。

この、日常性から理論的態度への移行は、われわれが日常的なものの見方から解放される過程、われわれが日常的に与えられていた意義的なものを超越していく過程である (SZ,363)。そして、そのさいには、事象のあり方の新たな投企 (構想) が必要とされるということから、日常性においてすでに所与のものとされている意義的なもののあり方、つまり日常性において見逃されていた、その意義的なものの存在体制・存在が問題とされているということがわかる。そうすると、理論的態度への移行、すなわち学問の成立においては、ハイデガーの考える哲学——存在者の存在に関わるものとしての哲学 (Vgl. GA22,7, GA61,60) ——が必要とされていることになる。それゆえハイデガーは、「学問はすべて、潜在的にそして根本においては哲学である」(GA25,38) と主張する (Vgl. GA9,244, GA29,30,33)。この、哲学を学問の根本つまり原学問 (Urwissenschaft) とする

把握は、具体的に何を意味するのであろうか。次の引用を見よう。

「形而上学に基づいて現実存在しているときにのみ、学問はその本質的な課題をつねに新たに獲得することができる。この課題は、知識の収集と秩序づけに存するのではなく、自然と歴史との真理の領域全体をつねに新たに開示することにする。」(GA9,121)

この引用では、一般学問の課題として考えられる「知識の収集と秩序づけ」ではなく、「自然と歴史との真理の領域全体をつねに新たに開示すること」が、「形而上学 (＝哲学)」に基づいて現実存在している「学問、つまり原学問としての哲学の課題として考えられている。つまり、哲学が原学問とされているのは、哲学が「領域」を「新たに開示する」もの、すなわち、学問の個別的領域を開拓・創造するものとして考えられているためである。この哲学把握は、学問領域の解体として捉えられた初期の哲学把握と矛盾しているように一見思われる。しかし、一般学問が一定の領域にとどまる、つまり一定の領域に囚われたものでしかないのに対して、ハイデガーの考える哲学は、領域の解体・創造のいずれにせよ、既存の領域に囚われることなく、既存の領域を超越するという点に関しては一貫している。

学問のいわずもがなの規定、「個別的なもの」という規定がなされていたのも、そうすると、既存の個別的領域を超越し、その意味で「全体的なもの」に関わるものとして目指された哲学的思维との対照においてであると考えられる。ハイデガーがこれらの哲学的思维に求めたこの方向は生涯を通じて一貫している。たとえば、一般学問の重視する理性・認識ではなく、「気分」(Stimmung)が重視された理由がここに求められる。理性・認識を方法とする一般学問が、存在者の一定の領域のみを探索対象とせざるを得ず——そのため「領域存在論」とも言われる(GA25,36)——、個別的学問とならざるを得なかったのに対して、気分を方法とする思维ならば、「存在者の特別な領域をいまだ意味しない」(GA9,189)「全体としての存在者(Seiendes im Ganzen)」(GA9,110,113,189f, GA55,206)への接近が可能になると考えられるからである。⁽⁹⁾

この、全体としての存在者へと開かれ、既存の個別的領域からの超越を試みるというハイデガーの哲学的思维は、単に既存の個別的領域から逃れるというだけではなく、新たな個別的領域を切り開くという面に次第にその力点が置かれるようになる。⁽¹⁰⁾そしてこの考えは、一九三三年の講演『ドイツ大学の自己主張』において一つの絶頂を迎える。この講演では、哲学としての学問(つまり原学問)(SU,II)が「全体としての存在者があるがままの存在者として問いかね、概念把握する」(SU,II)

ことで、「ドイツ民族の精神世界」が「つねに新たに闘い取」(SU,15)られ、「民族的・国家的現存在」が「導か」(SU,16)れねばならないと主張されている。原学問は、個別的な学問領域どころか、それらをすべて包括する、ドイツ民族の精神世界を切り開く役割を期待されるにいたっている。

三

原学問としての哲学に上記の役割が期待されるにあたっては、ハイデガーがもともと堅持していた姿勢にある変更が加えられている。ハイデガーにおいて哲学(原学問)は、一九一九年以来、一つの全体つまり「全体としての存在者」を目指すものとして捉えられていた。それゆえそれを通じて、既存の個別的領域に囚われることなく、新たな(とくに学問の)個別的領域を切り開くことがその目的とされ得たのである。しかし「ドイツ大学の自己主張」に見られるように、個別的領域ではなく、それをすべて包括するような「世界」、つまり「全体としての存在者」(GA9,143,145, GA69,19, HW,87)がそれ自身切り開かれるために、目指されるべきものとされるなら、そこでは、今まで原理的に区別されてきた、「全体」と「個別」との差違が無視されてしまっている。「全体」は無限定なるがゆえに、「個別」つまり被限定態の基盤として働き得たのに、もし創造されるべ

きもの、つまり一定の秩序を有するべきものとして捉えられるなら、すでに限定を被ったものとして考えられていることになってしまう。

この点に関する曖昧さは、一九一九年の講義にすでにその萌芽が見られる。そこにおいて挙げられていた、個別的学問・理論的態度の還帰すべき先としての意義的なものの体験は、それが一定の秩序を有するものとして考えられたとき、被限定態の源泉としてそれ自身は無限定なものでなくてはならないというあり方をすでに放棄してしまっている。われわれのあり方が被限定態としてしかあり得ないという点をハイデガーが見逃していたわけではない。しかし、その思惟の初期において、ハイデガーによって、解体されるべき被限定態として挙げられていたものは、まずは、先に見られたように理論的態度（一九一九年）、次には「伝統」（Tradition）（一九一九年／二二年）（GA9,34）であつて、意義的なもの・日常性はそれに先立つ、いまだ無限定なものとして捉えられている。¹³ 日常性が伝統と等しいものとされ、解体されるべきものとされるのは、管見の限り、一九二四年になつてからである（Vgl. BZ,14）。しかし、本論第二節の引用（GA29,30,137）にも見られたように、その後も、日常性が「全体としての存在者」として捉えられる箇所もあり、日常性と学問との関係には揺れが見られる。

日常性と学問との関係が画定されるのは、ハイデガーの思惟

が確定されるのに対応している。存在の問いというハイデガーの哲学的課題と一般学問との境界は、存在者の存在体制・存在へ目を向けるか否かに求められる。この点において、存在を見逃し、存在者にのみ関わっている学問的態度には日常性との間に差違が認められず、日常性から学問的態度への移行は無媒介になされるものと考えられる（Vgl. FD,1）。さらにハイデガーは、一九二六年以降、一般学問を「実証的学問」・「実証主義」という名称のもとに一括するが¹⁴、「実証的学問」・「実証主義」の態度も、上記の点において、日常性におけるものと変わらないうとして、実証主義を「素人」（GA26,200）と併称することさえする。そして、このように、日常性と学問的態度とが同一視されるにつれ、学問的態度において対象となる存在者の現出を可能にするものとして考えられていた投企は——投企という術語自体は次第に放棄されるものの——日常性の成立においても働いているものと考えられるようになる。日常性において学問的理論に相当するものは先入観（伝統）としてわれわれに与えられているが、これはわれわれに先立つて過去になされた投企により与えられたものだと考えられている（Vgl. FD,32, HW,38）。おのれは、投企により与えられた先入観に囚われてはいないと主張する人がいるかもしれないが、このような主張がなされるときこそ、先入観はもつとも強くその人を支配しているのであり、その先入観、そしてその投企が問題とされうると考えられ

る (FD,30.37)。

理論的態度・学問と同一の構造により成立していると考えられるにいたった日常性は投企により、しかも、妥当領域を広げた投企により超越されるもの、新たな世界の投企により変革されうるものとして把握される (Vgl. EM,47f)。『ドイツ大学の自己主張』(一九三三年)はこの把握に基づいて成立している。しかし、ハイデガーは一九四五年に当時のことを振り返って、「学問はもはや革新の試みとしては規定不可能」(SU,36)であることがその後明瞭となったと述べている。これは、ハイデガーの、フライブルク大学総長としての大学改革の挫折にその原因を求めることも可能であろうが、ハイデガーの中期以降の思惟をたどると、ハイデガーの思惟がより徹底化された帰結として考えられる。それを以下に見ていこう。

ハイデガーはその中期以降の思惟においても、おのれの思惟と学問との基本的把握を一新するわけではないが、おのれの思惟や学問で考えられていた内容をより深く捉え直すことによりおのれの思惟と学問とを峻別し、(ハイデガーがおのれの思惟と見なしていた)哲学を原学問とするような両者の曖昧な領域を明確に区分けするようになる。ハイデガーの思惟と峻別された学問の課題を、個別的領域内における「知識の収集と秩序づけ」とする把握は、前期のものと同様である (Vgl. EM,36)。だが、ハイデガーの中期の思惟においては、この「知識の収集と

秩序づけ」の具体的な手続きが説明され、その意味が明瞭にされる。「知識の収集と秩序づけ」がなされるのは、当該学問の個別的領域内においてである。投企により個別的領域が与えられているときには、それと同時に、それに適した概念性・対象性が与えられ、そして学問的探求の進むべき軌道までもが、これらの概念性・対象性に拘束されるかたちで決定されてしまっている。それゆえ、学問の課題である「知識の収集と秩序づけ」は、この軌道に沿って前進する手続きとして考えられる。すなわち、個別的領域が投企された時点で、進むべき方向があらかじめ可能性として与えられており、そのあらかじめ与えられた方向へ実際に進むことで、与えられた可能性を現実のものとして撰取同化するというのが「知識の収集と秩序づけ」なのである。ハイデガーは、このようなあり方をした学問の特徴として「経営」(Betrieb)・「実験」(Experiment)を挙げている。与えられた可能性を現実化するには、その手続きのための「技術化」・「組織化」(GA13,18)が必要となる。その組織化された手続き、そしてそのための場として研究所が必要とされるという事態が、経営と名づけられている (HW,81f. Vgl. GA12)。これは、可能性の現実化の過程が確定されているがゆえに可能となっている。学問のもう一つの特徴である実験は、投企を通じて与えられ、「法則」として妥当している理論に事象が合致するかどうかを検証する手続きである (HW,79f)。実験では、法

則に合致する事象のみが真なるものとして採用され、合致しない事象は真ならざるものとして廃棄される。学問の特徴として挙げられる「経営」・「実験」のなす手続きはいずれも、投企によりすでに与えられている軌道・法則を前提している。そして、この手続きを通じて成果を確保していくことで、学問の個別的領域はおのれの存在意義を確認し、おのれの妥当領域の拡大を図る。それゆえハイデガーは、学問は「すでに開かれている真理領域の拡張である」(HW, 8)と述べている。

このように、おのれを正当化し、おのれの妥当領域の拡大を図る学問は、その必然的な結果として、最終的には他の思惟の可能性を排除するにいたる。その中でもとくに数学的投企に基づいた学問(近代自然科学)は圧倒的な威力を誇り、その支配のもと、日常性は他の思惟の可能性を許容できないまでにいつていると後期の思惟におけるハイデガーは考える(Vgl. GA9, 76, FD, 11, 38, Gl, 25, SD, 65)。つまり、「学問はもはや革新の試みとしては規定不可能」(SU, 39)であるとハイデガーが考えるようになったのは、おのれの拡大化を図る学問が日常性全体を覆うにいたり、もはや他の可能性の生ずる余地がなくなつたと判断されたからに他ならない。なるほど、それでも、学問の新領域が実際にいまだに産み出されている。しかしそれは、各学問の領域内においてのことであり、もはや存在が問題にされるような(事象のあり方が投企されるような)根本的なもの

としては認められない(Vgl. SD, 65)。ここにおいてハイデガーは、「学問的・技術的世界」のみが許容されるなか、従来領域存在論を確立してきた哲学はその終焉を迎えたと宣言する(SD, 65, GA9, 341 Anm.)。

しかし、ハイデガーは哲学の終焉を宣言しながらも、おのれの思惟の可能性まで放棄したわけではない。哲学の終焉後も「存在・現前性の内で統べているあけ開け(Lichtung)」(SD, 74)が思惟の課題として残っていると主張される。このあけ開けは、「現前し脱現前するものすべて(alles An- und Abwesende)に対して開かれているもの」(SD, 72)であるといわれる。ハイデガーにとって、「現前」とは存在を、「現前しているもの」とは存在者を意味している。⁽¹⁵⁾「現前しているもの」に対してのみ開かれているのであれば、それは学問であると考えられる。しかし学問は成果を産み出し、それを確保するものなので、「脱現前するもの(≡現前しないもの)」に対して開かれることはない。これと対比すると、ハイデガーの思惟とされる、「現前し脱現前するもの」に対して開かれる思惟は、なにかを産み出すにしても、それを確保することなく、消え去らしめさえるような思惟でなければならぬであろう。そうすると、学問、そして従来の哲学把握(原学問としての哲学)においては、学問的成果としての存在者や新たな学問的領域を産み出す面のみが認められていたのに対して、そうして得られた成果・領域でさえ固

執することなく放置・放棄するような思惟、つまり、成果・領域から完全に逃れて可能性へ開かれ、しかも、おのれ自身が導いた可能性にさえ囚われることのないような思惟、もはや開かれるべき方向をも持たないような、完全に開かれた可能性に開かれる思惟をハイデガーは最終的におのれの思惟とするにいたったと考えられよう。そしてそのような思惟においてこそ徹頭徹尾可能性に開かれる可能性、たとえば、圧倒的な仕方で日常性を支配する自然科学を前にしても、他の可能性への示唆をなしうる可能性が得られると考えられたのである。

最後に残された、「学問は思惟しない」という主張の意味だが、これは、ハイデガーが何を思惟として捉えたかを省みれば、もう多言を要しないであろう。「学問が思惟しない」ことに關しては、「学問的領域の本質」に学問が「接近路を持たない」(WD.57) こと、「探求様式に従ってそれぞれの対象領域に關わりそのうちに定住する」(VA.133) ことなどが挙げられている。要はこれは、学問が一定の領域の内部でのみ成立し、そこで採用される概念・探求方法などすべてがあらかじめ決定されているということを述べているにすぎない。¹⁶⁾ ハイデガーにとつては、制限された思惟、さらなる可能性が排除された思惟はもはや思惟の名に値しないのである。

おわりに

学問は本来、われわれの洞察を深めるべく一定の領域を切り開くものでありながら、その切り開かれた可能性を徹底化するあまり、逆に他の可能性を排除し、われわれの洞察を一面化する傾向を有する。これは、それにより得られる射程が長ければ長いほどそうである。現に、現代のわれわれは自然科学による以外の可能性を許容し得ないほどである。たとえば、太陽は核融合する太陽であり、天照大神ではない。正しいのは地動説であり、天動説ではない。このような事態に対して、他の可能性に対しても開かれた領域として持ち出されうるのが日常性である。もちろん、日常性においてもすでに一定の可能性が支配的であり、とくに現代においては、学問的認識の支配のもと、他の可能性が許容される余地はほとんどなくなっているように思われる。しかし、本来日常性はあらゆる可能性の基盤として、特定の可能性に固執しないもの、他の可能性を排除することのないものだったはずである。日常性全体を覆うにいたるほど圧倒的な權威をふるう学問的認識を可能性の一つとして捉え、日常性を本来のあり方へともたらそうとする試み、さらなる可能性の受容を可能にしようとする試みは、現在の自然科学の普遍性を顧慮すると周囲の人間の嘲笑を買うだけのものにすぎないかもしれないが、われわれの思惟のあり方を一面的にしないた

めには必要な課題である。ハイデガーの試みは、可能性を閉ざさないという——そのためにおのれ自身が乗り越えられるとしても——思惟自身が本来有していた能力を取り戻そうとする試みだったのではないかと考えられる。

注

Vittorio Klostermann社のハイデガー全集 (Gesamtausgabe) からの引用箇所は、GAの後に巻数と頁数をつけることで記す。ハイデガーの他の本からの引用箇所は、以下の略号の後に頁数をつけることで記す。引用者による補足は〈〉で、省略は…で表現する。

BZ: *Der Begriff der Zeit*, Tübingen, 1989.

EM: *Einführung in die Metaphysik*, Tübingen, 5., durchges. Aufl., 1987.

FD: *Die Frage nach dem Ding: zu Kants Lehre von den transzendenten Grundbegriffen*, Tübingen, 3., durchges. Aufl., 1987.

GI: *Gelassenheit*, Pfullingen, 3., Aufl., 1959.

HW: *Holzwege*, Frankfurt am Main, 6., durchges. Aufl., 1980.

ID: *Identität und Differenz*, Pfullingen, 1957.

KM: *Kant und das Problem der Metaphysik*, Frankfurt am Main, 5., Aufl., 1991.

SD: *Zur Sache des Denkens*, Tübingen, 3., Aufl., 1988.

SG: *Der Satz vom Grund*, Pfullingen, 3., Aufl., 1965.

SU: *Die Selbstbehauptung der deutschen Universität. Das Rektorat 1933/34*, Frankfurt am Main, 1983.

SZ: *Sein und Zeit*, Tübingen, 16., Aufl., 1983.

VA: *Vorträge und Aufsätze*, Pfullingen, 1954.

WD: *Was heisst Denken?*, Tübingen, 4., durchges. Aufl., 1984.

(1) アリストテレス、『形而上学上』、出隆訳、岩波書店、岩波文庫、昭和三十四年発行、二二頁。

(2) ドイツ語のWissenschaftは日本語では「科学」とも翻訳されうるし、また、以下においては「科学」と翻訳した方が適切な場合もあるが、術語の統一をはかるため、自然「科学」と訳す以外は「学問」と翻訳することにする。

(3) 一九五五年にはさらに明瞭に、「思惟には二種類あり、両者はそれぞれの仕方で正当であり必要である。それは、計算的思惟(『近代学問』と省察的思惟である)(GI,13)と述べられるにいたる。ハイデガーによる学問批判が決して学問の否定ではないことは、晩年の思惟になるほどより

明確にハイデガー自身によって捉え直される。

- (4) ハイデガーによる学問批判の考察をはじめに先立ち、一つ注意を促しておきたい。ハイデガーの学問批判はつねに一貫した視点からなされているが、この批判はハイデガーの生涯にわたって行われたものだけに、思惟の深化、批判の重点の置き方などに応じて、使用される術語に関しては揺れが認められる。ハイデガーの思惟の把握を最終的な目標とするわれわれはこの点を考慮して、個々の術語の変遷に拘泥することなく、どのような思惟が批判され、どのような思惟の展開・堅持が意図されたのかという点にわれわれの議論を限定した。
- (5) 年代順に主要な箇所を列挙すると、GA56/57:24,25,33, GA22,287, GA9,48, SZ,10,393, GA24,17, GA25,28,31,32,35,36, SU,13, HW,75, SD,64などが挙げられる。
- (6) つまりハイデガーは、客観化・理論化を伴う学問的発話を制限を被ったものとして考えているのである (Vgl. GA9,358)。
- (7) ハイデガーはつねに、真理の生起——学問・芸術作品、その他であれ——を漸次的なものではなく、突発的なものとして考えている。この点に関しては次が詳しい。

Günter Figal, *Der Sinn des Verstehens*, Stuttgart, 1996, S.39.
Hans-Georg Gadamer, *Gesammelte Werke, Bd.3, Neuere Philosophie I, Hegel Husserl Heidegger*, Tübingen, 1987, S.261.
- (8) 哲学を原学問とする把握は、一九一九年の講義以来のものである (Vgl. GA56/57,32)。
- (9) ハイデガーはおのれの思惟を一貫して全体に関わるものとして捉えている。GA9,2,103,118f.,198f.,241, GA15,295, GA22,2, GA26,199,202, GA29/30,7f.,13,35,36, GA56/57,26,33, GA59,188, FD,3, HW,205, ID47, KM,8, SU,11,12などがその主要な例として挙げられる。
- (10) ハイデガーの思惟においては、理性・認識よりも、気分の方が優れた開示能力を有していると考えられている (Vgl. SZ,136, HW,9)。次の論文の当該箇所も参照。

Rainer Thurnher, „Gott und Ereignis——Heideggers Gegenparadigma zur Onto-

Theologie“, in: *Heideggers Studies* Vol.8, Berlin, 1992, S.81-102, bes. 85f.

- (11) 一九三〇年代には、次のような発言が散見される。

「しかし真の哲学的知は：あらかじめ跳躍し新たな問題領域・問題観点を開く知である。：哲学的省察は、あらゆる態度・決定に対して新たな視線の軌道・尺度を準備する。」(GA13,18, Vgl. GA45,3)

「哲学は経験を開く。」(GA65,37)
- (12) 一九二三年の講義になると、学問も伝統により覆われているものと考えられる (Vgl. GA63,74f.)。
- (13) 「日常性」という語がはじめて術語化されたと思われる、一九一九／二〇年冬学期の講義において、「日常性」は「目立たない色合い」と並置され、確固たる被限定態に先立ち非表明的である面が強調されている (GA58,39)。
- (14) 誤解を招きやすいが、ハイデガーが「実証的学問」・「実証主義」という名称のもとに考えているのは、たとえばコントの思惟などではない。「言葉の本質的な単純さへと立ち返る必然性」(GA15,351)を認めるハイデガーは、「実証的」(positiv)という語にラテン語の *ponere* (置く) を読みとり、*positum* (置かれたもの) 、「つまり存在者を対象とする学問を総じて「実証的」と名づけている (Vgl. GA22,6ff., GA9,48,66f., GA24,17,460, EM,36, FD,72)。
- (15) 存在はハイデガーの初期の思惟以来、「現前」(Anwesen) として捉えられていたが、次第に「現前」に「脱現前」(Abwesen) の契機も併せ持たされるようになる。とくに一九四一年の講義においては、学問の本質である技術は、その成果を可能な限り長期にわたって持続させようとするが (GA51,17) 、「存在は本来、必ずしも恒常性を目指した現前ではない」ということが述べられている (GA51,112f.)。この把握が、哲学を越えたフアンパの思惟を準備するものとなっている。
- (16) これに関して、ヴァイツゼッカーは次のようにいつている。

「実証的学問、今日多用されているクーンの言葉における学問 (科学) (science) は、まさに、困惑させるような未解決の根本の問いを立てないことを通じて、可能とされている安定した進歩を知っている。これが、

ハイデガーが「学問は思惟しない」というときに指示したものである。」
(Carl Friedrich von Weizsäcker, *Wahrnehmung der Neuzeit*, München, Wien, 1985,
S.159.)

(なかはしまこと 大学院博士後期課程・哲学哲学史)